



Title	〈図書紹介〉ゲイル・グリート・ハナ著，今竹翠翻訳・監修『エレメンツ・オブ・デザイン』
Author(s)	西村，美香
Citation	デザイン理論. 2011, 58, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゲイル・グリート・ハナ著，今竹翠翻訳・監修

『エレメンツ・オブ・デザイン』

美術出版社，2006年

西村美香／明星大学

『エレメンツ・オブ・デザイン ロウェナ・リード・コストロウと視覚関連の構造』はアメリカのデザイン教育の一端が知れる書物である。ニューヨーク市ブルックリンに1887年に創設された私立美術学校プラット・インスティテュートを舞台とし，そこで1938年より50年にわたってインダストリアル・デザインを教えたロウェナ・リード・コストロウ（1900-1988）のデザイン原理と実践の軌跡である。

1930年代当時，アメリカのインダストリアル・デザインはスタイリングという言葉に代表されるように機能よりもセールスが重視され，外観や見かけをつまみパッケージを考案するのと同様に考えられていたふしがある。大衆の趣味に迎合するあるいはそれを操作するコマースリズムが優先された時代であった。グラフィック・デザインや広告，舞台出身のデザイナーが製品のデザインを手がけ，いわゆるインダストリアル・デザインの専門家はまだ現れていなかった。そんななか1934年にカーネギー工科大学がアメリカで初のインダストリアル・デザイン科を設置し，ついでプラット・インスティテュートもその2年後に準備をはじめた。ロウェナ・リード・コストロウは夫のアレクサンダー・コストロウとともにその準備段階からかかわるのである。

本書はロウェナ・リード・コストロウの生涯と同時にその時代のデザイン教育のアメリカでの状況を語ることから始まる。ロウェナ・リード自身はデザインを専門に学んではおらず（それは時代的にいっても当然であろうが）絵画と彫刻を学び，その後社会で活動

していた。先にカーネギー工科大学で教鞭を執っていた夫と彼の同僚ドナルド・ドゥナーを通して工業界に接する機会があり，デザインとくに3次元デザインに興味を向けるようになった。おりしも1937年にはシカゴにニューバウハウスが開講されモホイ＝ナジラによってヨーロッパのモダニズムが導入されたが，プラットの教育理念はそれと類似する点もあるもののアプローチには違いがあり，とくにリードの主張はバウハウス派とは異にした。彼女はデザインの視覚的，審美的側面の卓越性を主張し，美的表現こそはデザインのレゾン・デーテルと定義しており，構造の追求や実用性の重視などの機能主義からは一線を画した。「悪いデザインの口実に機能性をもち出してはならない」と彼女はいつも学生に警告したという。

本書の中心はリードの担当した3次元視覚抽象の基礎コースにおける実際の課題の紹介である。教職にあった最後の30年間に教えたすべての3次元基礎体験の訓練課題に加えて，いくつかの上級3次元訓練課題と，彼女の代表的訓練課題である空間分析を包括する。それは「基礎研究」「形態の上級研究」「スペースの研究」「展開」と進行する。どれも具体的な練習課題で，いくつもの学生の作品を画像で示しながらその課題によって何を学ぶべきかの確かなポイントが挙げられている。現代でも実際に有効かつ有用な課題である。またそれらを見るとリードが形態とともに空間に非常な関心をもって課題を用意したことが分かる。実体（オブジェクト）のデザインのみならずそれを囲む虚の部分つまり空間（ス

ペース)のデザインに注視している。学生はこうした課題をひとつずつクリアし体験を積み重ねて行くことで抽象の感覚を習得する。課せられた課題を解くために必要な精神訓練を繰り返しそうして形態と空間の直感的理解を会得できるようになるのだ。リードはその手助けをした。その深い洞察力で妥協を許さないリードは「抽象の申し子」とさえ呼ばれた。本書の最後にはそうして彼女に育てられた学生達が社会にでてデザインしたノール社の家具やシトロエンの自動車などが「プロフェッショナル・ワーク」として紹介されている。

本書は1982年に National Endowment for the Arts (米国芸術基金)の助成を受けて、リードが視覚関連学習アプローチの集大成となる書籍の出版を計画していたことに端を発する。彼女は方法論を記録しようと、言葉を定義したり、核心の練習課題をていねいに程度別に並べたりしていた。しかしこのプロジェクトを具現化する前に彼女は逝ってしまい、意志は元の学生や同僚達に引き継がれた。彼らによりロウェナ・リード・コストロウ基金が設立され、出版も引き継がれた。そうして本書の原著“Elements of Design: Rowena Reed Kostellow and the Structure of Visual Relationship”はニューヨークの出版社 Princeton Architectural Press より2002年に出版されるに至った。

日本語版の監修と翻訳は建築家でありインダストリアル・デザイナーの今竹翠である。今竹もロウェナ・リードの教え子であった。1962年にプラット・インスティテュートのインダストリアル・デザイン科を卒業し同大学院に進学するかたわらせネラル・モータース社でパート・タイムで働いていた。リードは自身も女性であるが、彼女はとくに女子学生の、そして女子卒業生の産業界や大企業への

就職に力を注いだという。今竹もその恩恵を受けた女子学生の一人であろう。リードは当時、男性支配的社会であった業界や学会で一目置かれる存在であり、彼女の後押しは権威ある力であった。

インダストリアル・デザインの黎明期ともいえる1930年代より人材の育成に尽力し、戦後のアメリカデザインの発展に貢献したロウェナ・リード・コストロウの活動は特筆すべきであり、彼女の考案した3次元デザインへの基礎訓練は普遍的な力強ささえもつ。